

身体を通して言葉の意味を理解するための試み

鈴木 由美子

科目名：身体を動かしながら学ぶ日本語

レベル：初級 ①・②／中級 ③・④・⑤／上級 ⑥・⑦・⑧

履修者数：30名

1. 本科目の概要と開設の経緯

本科目は日本語学習を始めたばかりの1レベルの学習者を想定して設計し2018年春学期に開講したばかりの科目である。筆者は2009年度から早稲田大学日本語教育研究センターで1レベルを担当しているが、これまでの傾向として履修者の半数以上が半年以内の日本語学習歴で、日本語教育研究センターでの学習期間は半年から1年以内である。また多くは今後日本語の継続学習の機会を持つ予定がない。年々、片時もスマートフォンを手放さない学生、離席する学生などが増え、グループ活動などで学生間のインターアクションを促すことが難しくなってきたように感じる。

本科目を新たに開設した理由は、上記のような学生を対象にどのようなコース設計なら、学生が教室という「いま自分がいる場所」で教師やクラスメイトという「他者」と言葉を学習する体験を実感できるのかを筆者自身の体験から実証してみたいと考えたからだ。

筆者自身、アメリカ、フランス、タイ、ボリビアで、それぞれ滞在期間は異なるが滞在中現地の言語を学習した経験がある。その時に学び、今でも覚えている単語やフレーズは、身体の動きと共に獲得したという実感がある。継続学習の意欲が今はない学生にとって、ふとした時に学習内容を思い出せるようなそういうクラスを実現させたいと考えた。

2. 授業での取り組みと問題点

以下の表は2018年度春学期に実施した本科目の内容と活動をまとめたものである。

表1 2018年度春学期授業概要

時期	内 容	活 動
1～6週目	身体の部位を表す言葉、動きを表す言葉（動詞・副詞・オノマトペ）、位置を表す言葉	TPR、インプロメニュー、ゲーム、ポーズを言語化、動きを言語化、語彙マップ作成
7週目	中間テスト	コース前半で学習した表現を筆記式で出題。別室で一人ずつ指示通りに身体行動を行う。
8週目	発表会	ある一連の身体動作を日本語で表現しワークショップを行う。
9～13週目	感情を表す言葉（動詞・形容詞・オノマトペ）、色	ゲーム（かるた、すごろく、塗り絵） 語彙マップ作成
14週目	最終発表会	ある感情をテーマにシナリオを書き、演じる
15週目	味覚・触覚を表す言葉（形容詞・オノマトペ）	ゲーム（箱の中身はなに？）、試食（味覚）

2-1. ウォーミングアップ

教室に来て着席しても、スマホでSNSを見たり、ウェブチャットをしたりする学生の様子から、「これから日本語を学ぶ」という身体になっていないように感じていたので、授業開始時に自分が教室にいることを意識させるような活動を取り入れた。

2-2. 事前・事後学習

毎回のクラスで学習する言葉は事前に CourseN@vi にアップロードしておき予習を促した。なるべく必要最低限の言葉にとどめ、クラス当日、活動のまとめとして語彙マップ（類義語、反義語、関連する言葉など）をグループで作成した。その語彙マップをもとに、授業で学んだ言葉の品詞、類義語、反義語などを書く語彙リストの作成や動作を記述する作文を宿題とし定着を試みた。

2-3. 活動

動きを表す表現では、「V ましょう」「V て・ないでください」「V ながら V」「V て V」などの文型を Total Physical Response で導入した。コース初日に動詞の活用記入リストを配布し、事前学習を促した。中間テストで「て形」を使った記述はできても、こちらの指示通り動くことが難しい学生が多かった。

感情を表す表現では、「感情すごろく」という活動を行った。サイコロの出た目によって自分の感情（かなしい・うれしい・たのしいなど）の体験を語る活動で、事前に文例を提示した。

発表会では、文法的な誤りが見られるグループもあったが、概ね学生一人一人の興味・関心や体験、ユニークさがよく出た発表になっていたと感じた。

3. 成果と今後の課題

まだ1学期間のみの運用で、次学期の学生にはどのような反応が起こるか分からないが、今後も学生の様子を見ながら取り組みを続けていきたい。

（すずき ゆみこ，早稲田大学日本語教育研究センター）